

A study on relationships between experiences in from a kindergarten to an elementary school and track and field results taken of athletes

1K09B011-7 石井 祐人

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 磯 繁雄先生

【研究の動機・目的・方法】

私はこれまで、学校体育のあり方や良い体育授業の条件などを理論と実践の両面から学んできた。そこで、指導していく際に、子どもの運動経験を知ることによって、より良い運動発達に役立つのではないかと考えた。子どもの頃に行っていたスポーツ経験が、その後の運動能力の形成にどのような影響を与えていくのかについて知りたいと思ったのが本研究の動機である。

本研究では、神経系の発達が著しい幼児期や児童期におけるスポーツ経験が、陸上競技の競技力にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにし、それらにどのような関係性があるかについて検討することを目的とする。

本研究の研究方法は、運動発達に関する資料をもとにした文献研究と、陸上競技の短距離選手を対象とした運動経験に関するアンケートによる調査研究で進めていく。

【第1章】幼児期ならびに児童期における運動経験の重要性

第1章では、「幼児期ならびに児童期における運動経験の重要性」ということで、第1節で「幼児期における運動の意義」、第2節で「児童期における運動の意義」について述べている。幼児期における運動の意義としては、これから生きていくために必要な基本的な動作を獲得するとともに、運動遊びによって運動神経の向上が見込まれる。しかし、この時期の子どもの運動は運動浪費という余分な過剰運動を示し、目的に適合しない運動を出現させる。児童期においては、幼児期にみられた運動浪費が合目的性と経済性へと変化していき、非常に精巧な運動になっていく。さらに、この時期に最も特徴的なのが「即座の習得」という、新しい運動経過を素早く把握してうまく適応する能力である。スポーツ活動を通してできるだけ多くの運動形態を習得させることが必要になってくる(金子・朝岡,1990)。

【第2章】年代別に見た運動発達

第2章では「年代別に見た子どもの運動発達」ということで、第1節で「幼児期にみられる運動発達の特徴」、第2節で「児童期にみられる運動発達の特徴」について述べている。幼児期における運動発達では、スキヤモンの発育曲線にあるように、神経型の発達が成人の約80～90%に達しており、この時期に行われる運動がこれ以降の運動神経の発達に大きく関わっていることがわかる。また、筋力や持久力などの一般型についての発育状況は成人の約30～40%のみであり、この時期における向上の促進は期待できない。児童期に入ると、運動学習能力が急速に発達していき、環境面でも運動に携わる時間が増える。また、「時機を得た専門化」という問題も考えていかなければならない。競技種目によってどの時機にどのような指導をしていくことが有効であるのかを検討していかなければならない(金子・朝岡,1990)。

【第3章】陸上競技選手の就学前から小学校までのスポーツ経験と競技力の関係

子どもの頃の運動経験が陸上競技という種目の運動発達にどのような作用をもたらしているのかを明らかにしていく。今回のアンケート調査では、W大学陸上競技部の短距離選手21名を対象とする。調査結果として、対象となった21名の全員が幼児期、または児童期においてスポーツ少年団や地域スポーツなどで何らかのスポーツを経験していた。また、ほとんどの人が幼児期または児童期における運動経験が今の競技に役立っていると回答した。さらに、スポーツ経験において陸上競技を経験している人と他のスポーツを経験している人を比べてみたら競技成績に違いはみられなかった。これは、必ずしも幼児期や児童期に陸上競技を経験する必要はないということを示している。陸上競技においては幼児期または児童期において何らかのスポーツを経験していることが大切である。